

2012年
6月11日
月曜日

林 宣嗣 教授 (財政学)

日本人の幸せと東京一極集中

ブータンが国づくりの理念として掲げる「国民総幸福量」(GNH) (グロス・ナショナル・ハッピーネス) が注目されています。こうしたなか、日本でもさまざまな視点から、日本の幸福度を測り直そうとする動きが盛んです。法政大学大学院が「幸福度」の都道府県別の順位を発表しました。「生活・家族」「労働・企業」

「安全・安心」「医療・健康」の4つの部門から指標を選んで幸福度を評価した結果、福井、富山、石川の北陸3県がベスト3を占めました。東京は38位で大阪は最下位です。

私たちが効用の最大化を目指して行動するならば、生活満足度が高い地域では人口が増え、低い地域では人口が減少するはずだと、ところが、最近の人口の動きを見ますと、幸福度で高いランクに位置する福井県、富山県、石川県の人口は減少してい

るのに対して、幸福度の低い東京は増加、全国で最下位の大阪の人口はほぼ横ばいです。

このような現実を生み出した要因は2つ考えられます。第1は幸福度の計り方が間違っているのではないかとということ。しかし、調査で取り上げられた自然環境、家族との関係、安全、健康といった項目は、すべて幸福度に大きく影響するものであり、調査項目の選択が間違っているとは思えません。第2は、世代によって項目間で優先度に違いがあるのではないかとということ。高齢者にとつての重要な項目と、若者が重視する項目は違うでしょう。つまり、若者にとつてとくに重要なのは働く場であり、人口移動の傾向を見ると、若い人たちの移動が顕著で、高齢者の移動はそれほど多くはないのです。したがって、第2の要

因がどうも効きそうです。

ただ、若者にとつて、家族や地域とのつながり、自然環境、安全といった項目が大切ではないはずはありません。となると、東京をはじめとした大都市で生活することは、「幸福度」に関わる他の項目を犠牲にしていることになりそうです。働く場所があれば、出身地で暮らしたいと考える若者は多いのです。つまり、住みたいところは住めない。このことが、日本人の幸福度を低めていると考えることはできないでしょうか。

東京はたしかに活気があって、魅力的な町です。しかし、東京一極集中には大きな落とし穴が隠されていることに注意しなくてはなりません。イギリスをはじめとする欧米先進国では、地域活力を強化するために、各地域が工夫できるような仕組みを作ることにエネルギーを注いで

います。その結果、ロンドン、パリ、ニューヨークといった大都市人口の対全国シェアは将来的にはほぼ一定と予測されています。これに対して、日本では東京圏のシェアはますます高まっています。

日本がブータンのようになることは不可能でしょうが、日本人の幸福度をあげることはできます。それは、選択肢を拡大することです。右肩上がりの経済成長が望めなくなった日本においては、選択肢のある豊かさを求めることの重要性はますます大きくなっています。

幸福度指標を作成し、ランキングを行うだけでは、日本人の幸福度は大きくなりません。なぜ、私たちは幸福度の大きい地域で暮らすことができないのか、その原因を考え、望ましい方向に持って行くことが求められています。